自然と技術が育まれた羽束の里

市内の山や川、橋の名称に冠(かん)された羽束(はつか)の名は、かつては小・中学校や保育所の名前にも使用され、今より身近な地名でした。

羽束は古代から文献にでてくる地名です。今から千年以上前の平安時代中期に編さんされた「和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」という百科事典には、摂津国有馬郡内の地名のひとつとして記載されています。また平安時代初期に現代の近畿地方に相当する畿内の主な豪族をまとめた「新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)」という書物からは、摂津国に羽束首(はつかのおびと)や羽束を名乗る氏族がいたことがわかります。さらに鎌倉時代や室町時代の文献には、羽束郡や羽束郷といった地名もみられます。羽束は平安・鎌倉時代には、和歌にもよく詠まれた地名でもありますが、作品にはひらがな書きで「はつか」と記されており、古代以来読み方も変っていないことがわかります。

この羽束という特徴ある名称は、何に由来するのでしょうか。関係する資料の研究からは、矢羽(やばね)に用いるワシやタカなど猛禽類(もうきんるい)に代表される大型鳥類の羽の束、そしてその羽を矢羽に加工するという技術やなりわいと関わる可能性が高いと考えられています。

これらの矢の生産は、律令政府で武器の製造をつかさどった兵庫寮(ひょうごりょう)という役所の管轄下にあり、その下で氏族としての羽束首氏(うじ)は、技術者である羽束氏を統率する役割を担っていたと考えられています。古代の高平地区周辺は、朝廷を守る武器としての矢の部品の生産地帯であり、その製造のための特殊な技術をもって朝廷に仕えた人々が暮らしていたのです。この技術者たちは、平安京の工房に出向いて仕事をしていたことも知られており、畿内を代表する技術者集団であったと思われます。

緑豊かな山野と、その上空を悠然と飛ぶ猛禽類。そしてこれらの自然の恵みを活かす地域の人々の巧みな知恵と技。そこに畿内でも特色ある古代の産業地帯が成立したのです。

生涯学習支援課 市史編さん担当